

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19251003

研究課題名（和文） アフリカ在来知の生成とそのポジティブな実践に関する地域研究

研究課題名（英文） Formation of African Local Knowledge and their Positive Practice  
: Area Studies Approach

研究代表者

重田 眞義 (SHIGETA MASAYOSHI)

京都大学・大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

研究者番号：80215962

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは、エチオピアにくらす人々によって絶え間なく創り出される様々な知(=在来知)の生成過程をこれまで認識人類学がふれなかった「認識体系と社会的な相互交渉の関係」と、開発学が扱わなかった「有用性と認知の関係」の両方を射程に入れて、グローバルな文脈に位置づけて解明した。さらに、この研究であきらかになった点をふまえて、研究対象となる社会への成果還元結びつくような研究活動を展開した。

研究成果の概要（英文）：The understanding of *local knowledge* in Africa that the project aspires begun by sampling from the confrontational views that had been presented by development studies and cognitive anthropology. The research revealed that both the relationship between the cognitive system and social mutual negotiation that cognitive anthropology did not refer to, and the relationship between usefulness and cognition that was not dealt in the field of development. The research presented the dynamic aspects of *knowledge* that both fields have overlooked, and conducted fieldwork on the changing processes in its multitudinous context for the development of communities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	10,300,000	3,090,000	13,390,000
2008年度	9,000,000	2,700,000	11,700,000
2009年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2010年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
年度			
総計	33,500,000	10,050,000	43,550,000

研究分野：アフリカ地域研究

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：Local Knowledge, 生業知、関係知、思惟知、エチオピア、ポジティブな実践、在来型保全、在来組織

## 1. 研究開始当初の背景

これまでアフリカをフィールドとする研究において、2つの分野で人びとの「知」が扱われてきた。開発学・応用人類学の領域では、介入される側の知識（例えば、農業慣行、環境保全、資源保護、社会集団の編成や規範に関する知識）をいかに開発の役に立てることが問題にされてきた一方で、認識人類学の分野では、民族知識(Folk knowledge)が文化の体系を反映していることを前提し、研究対象を動植物や色彩の分類体系のように再検証可能な「知識」に限定してきた。

知に関してその実用的側面に意義を認めるか、認知的側面に普遍性を求めるかという2つの異なるアプローチは背反的なものではなく、むしろそれぞれの分野の学問的反省や展望のなかで相補的な視点として述べられてきた経緯がある。方法論的にも両者には多くの共通点が見られる。

本研究が問題にする「在来知 (Local knowledge)」とは、人びとが自然・社会環境と日々関わるなかで形成される実践的、経験的な知を指す。このような「知」を実体として取り出してみせることはできない。本研究ではそれぞれの局面で立ち現れる知の存在様式（構造と機能、およびそれらの動態）に注目してその生成と実践の過程を扱った。分析の主な対象は、人びとの生活における日常行為（発話や行動）とそれに関わるモノであった。

この研究がめざす「在来知」の理解は、まず開発学と認識人類学が対立的に呈示してきた視点を折衷すること、具体的には、認識人類学がふれなかった「認識体系と社会的な相互交渉の関係」と、開発学が扱わなかった「有用性と認知の関係」の両方を射程に入れることから始まった。そのためには双方がともに看過してきた知の動態的側面を、その生成と実践に注目し、変化の過程を多様な文脈に即してフィールドワークすることが求められた。

研究代表者は1986年以来、アフリカ在来作物の多様性とそれを維持してきた地域の農業実践がよってたつ知的基盤を「アフリカ在来農業科学」と名付けて、エチオピア西南部の農村でフィールドワークをおこなってきた

(重田1998,2002,2004)。その過程において、地域住民の生活のなかに「在来知」の生成と実践という切り口が有効と考えられる営為が多く含まれていることに気づいた。

その営為を分類した3つの研究領域は、以下に述べるように相互に密接に関連している。

(1) 生存のための生業の知:アフリカにおける生存の問題系は、研究代表者が村の生活のなかで生業と自然の認識人類学的研究を志した当初から関心を寄せていた。在来知の力で生

業をいかに持続的に維持していけるかという問題は現代アフリカにおける最も切実な課題であり続けている。

(2) 交渉される関係の知:しかし、農業生産や環境保全などの生存の問題系を考えるにあたって、対象となる自然への一方的な働きかけに注目するだけでは不十分である。介入や交渉の繰り返される開発現象に直面したとき、社会的文脈から孤立した知識の記述は無効となる。そこで、人—人、人—モノ、モノ—モノの相互関係がいかに交渉されていくかという関心が生まれた。

(3) よりよく生きるための思惟の知:そして、これら2つの知の生成と実践をうながす原動力となるものとして、ポジティブな実践を可能にするもうひとつの知を措定した。本質主義的であるという批判を恐れずにいえば、そこに「アフリカ的なもの」が見いだせると考えたのである。そしてさらに今日のエチオピアは、幾多の政変や自然災害を経てもなお、人びとが生存と交渉を通じてよりよく生きる生の営みが続けられている場として、在来知の生成とポジティブな実践が「エチオピア的なもの」として現前する可能性をもっていると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代アフリカに生きる人びとによって絶え間なく創り出される様々な知(=在来知)の生成の現場に我々が立ち会い、その動態を地域研究の視点からフィールドワークによって解明することであった。さらに、人びとが在来知をより良き生活のために活かそうとする営み(=ポジティブな実践)に注目し、その意味をグローバルな文脈に位置づけて理解することにあつた。在来知研究のもうひとつのねらいは、研究対象となる社会への成果還元に結びつくような研究活動を展開することであった。

本研究が質的にも量的にも十分な「生成される在来知とそのポジティブな実践」の事例を集積することによって、方法論主導の開発学とは異なるアフリカ地域研究の具体的で貴重な成果として提示することが期待された。これまでのアフリカ理解に横行してきた合理主義や経済至上主義などに対抗するという意味においても「アフリカ在来知」が各界になげかけるインパクトは大きい。また、実例の中で、在来知がその生成と実践のプロセスを経て制度化され、公共の知となる機序が解明できれば、アフリカ型の発展方策を考えるうえで積極的な貢献ができると考えた。

## 3. 研究の方法

本研究では、「アフリカ在来知 (African Local

Knowledge [ALK])」を措定したうえで、アフリカにおける人びとの営みを以下の3つの領域に分類して研究をすすめた。

#### (1) 生存のための生業の知【生業知ユニット】

アフリカにおいて、在来知の力で生業をいかに持続的に維持していけるかという問題は現代アフリカにおける最も切実な課題であった。この領域は以下の3つの研究班から構成された。

◇在来農業班：エチオピア・コンソおよびアリ地域において農業に関する在来知の生成に関して科学知との対応、生業技術の知、食品加工利用技術の知についての調査

◇ものづくり班：アリ地域などを対象に、土器や織物などにおけるものづくり技術の生成とポジティブな実践に関して、特に技術知の創造と学習過程に注目した調査

◇生物多様性由来保全班：アリおよびシダマ地域における農民参加型の作物品種の多様性保全について、在来知と庭畑の多様性の関連に注目した調査

#### (2) 交渉される関係の知【関係知ユニット】

農業生産や環境保全などの生存の問題系を考えるにあたって、対象となる自然への一方的な働きかけに注目するだけでは不十分である。介入や交渉の繰り返される開発現象に直面したとき、社会的文脈から孤立した知識の記述は無効となる。そこで、人一人、人一人モノ、モノ一人の相互関係がいかに交渉されていくかという関心が生まれ、以下の4つの研究班にわかれて研究をすすめた。

◇コミュニティー・コンサベーション班：エチオピア・アリおよびカファ地域において参加型景観保全、野生生物保全をめぐる国立公園と地域住民の関係、および森林資源の参加型保全についての調査

◇介入と交渉班：エチオピアにおける開発介入の実践知、フェアトレード、土地をめぐる紛争解決、難民への介入と交渉などの場面における実践知の調査

◇開発と在来組織班：エチオピアの開発や在来組織の活動におけるポジティブな実践に関する調査

◇音楽・宗教実践班：ゴンダール地方やアジスベバにおける吟遊集団やハラール地域のイスラム伝統芸能組織の音楽実践に関する調査

#### (3) よりよく生きるための思惟の知【思惟知ユニット】

上記の2つの知の生成と実践をうながす原動力となるものとして、ポジティブな実践を可能にするもうひとつの知を措定することをめざした。本質主義的であるという批判を恐

れずにいえば、そこに「アフリカ的なもの」が見いだせると考えた。そしてさらに今日のエチオピアは、幾多の政変や自然災害を経てもなお、人びとが生存と交渉を通じてよりよく生きる生の営みが続けられている場として、在来知の生成とポジティブな実践が「エチオピア的なもの」として現前する可能性をもっていると考え、以下の研究班によって研究を実施した。

◇アフリカ哲学班：在来知の生成と実践をめぐる思惟知について、他の2ユニットの実例を総合討論しながらまとめた。アフリカ哲学と実践知の関係についても考察し、最終的には、エチオピアの発展にとっての在来知の意味と、ポジティブな実践の投企的役割についてまとめることを目指した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果として、これまでの集中的なフィールドワークを通じて、エチオピアにおける在来知の諸相を以下の3領域にそって実証的に明らかにすることができた。

##### (1) 生業知ユニット：

・在来農業班の佐藤靖明がエチオピア南部地域において在来農業実践について調査をおこなった。ものづくり班の井関和代、金子守恵がエチオピア東、西、南部の織物・土器・鍛冶職人の生業パターンや在来の技法について広域調査をおこなった。

・農業に関する在来知の生成に関して科学知との対応、生業技術の知、食品加工利用技術の知について、エチオピア南部諸民族州、オロミヤ州において現地調査を実施した。ものづくり技術の生成とポジティブな実践に関して、特に技術知の創造や変容に注目した現地調査を南部諸民族州南オモ県において実施した。2008年12月1日～12日には、生業知研究ユニットものづくり班が企画立案して京都大学時計台100周年記念ホールサロンにおいてアジア・アフリカの在来知に関する展示をおこなった。

・農業に関する在来知の生成に関して、品種多様性に関する知の生成、有畜農業における牛耕技術と科学知との対応、農産物の在来型保存と食品加工利用技術の知について、エチオピア南部諸民族州とオロミヤ州において現地調査を実施した。高齢者の保持する老人知の生成に注目し、ケアの実践とその変容に注目した現地調査を南部諸民族州南オモ県において実施した。

・農業に関する在来知の生成に関して、エンセーテの品種多様性に関する知の生成、有畜農業における牛耕技術と科学知との対応について、エチオピア南部諸民族州とオロミヤ州において最終的な現地調査を実施した。生物多様性班の活動として、2010年10月に、

京都において *Problems of Seed, or Seeds of problem in African Agro-biodiversity* と題して、国際ワークショップを開催した。ものづくり班の活動として、2011年3月に国際フォーラムを企画したが、震災のため海外の参加者が欠席し、ポスター発表のみで国際フォーラムとして実施した。

(2) 関係知ユニット：

・コミュニティ・コンサベーション班の伊藤義将が、森林資源の参加型保全に関する調査をおこなった。介入と交渉班のトリナ・フアが、経済的な開発介入の実践についての調査をエチオピア西南部地域でおこなった。在来組織班のディル・テシヨメが、在来宗教実践における女性グループの活動について調査をおこなった。

・野生生物保全(南オモ)、伝統芸能組織(ハラール)、在来講組織(グラゲ)、在来宗教組織(シダマ)のポジティブな実践について、それぞれ分担者と研究協力者が当該地域において現地調査を実施した。また、2008年8月にナイロビで開催された自然保護に関する国際シンポジウムにおいて研究協力者が成果発表をおこなった。2008年9月17-18日、関係知ユニットの研究班がフィールド調査をおこなっているエチオピア東部のハラールにおいて宗教・音楽実践と無形有形文化財保全をテーマにした在来知に関する現地ワークショップを開催した。ハラール市と同地域で活動をおこなう女性自助組織、ハラール市博物館、アジスアベバ大学との共催で実施した。

・在来講組織(グラゲ)、在来宗教組織(シダマ)のポジティブな実践について、それぞれ分担者と研究協力者が当該地域において現地調査を実施した。また、2009年11月にアジスアベバにおいて、*A Roundtable on Communities and Cultural Heritage Centers in East Africa* と題する国際ワークショップをケニア、英国から研究・実践者を招いてアジスアベバ大学と共催した。昨年の国際ワークショップの成果を英文で出版した。

・エチオピア固有の在来宗教組織(シダマ)のポジティブな宗教実践について現地調査を実施した。最終年度は、成果のとりまとめと発表を主として思惟知ユニットの活動は実施しなかった。

(3) 思惟知研究ユニット：

・在来知の生成と実践をめぐる思惟知について、アジスアベバにおいて、ユニット長と海外研究協力者2名が他2ユニットの実例の報告をもとに総合討論をおこなった。

・在来知の生成と実践をめぐる思惟知について、海外研究協力者1名(JSPS 長期招へい研究者)が京都に5ヶ月間滞在して研究と討論

をおこなった。2010年3月には京都において国際ワークショップを開催し、思惟知班の報告を基に総合討論をおこなった。

・平成19年度は、国内研究会を3回と国際ワークショップをおこなった。国内研究会では、アフリカやアジアの各地域における生業実践について外部から研究者を招いて報告してもらい、在来知の生成とポジティブな実践について議論をかさねた。国際ワークショップでは、各班の若手研究者と海外の研究者が中心になってセッションを組織した。これ以外にも、各班が例会を2~5回開催した。ウェブサイト「アフリカ在来知研究会」を立ち上げて研究計画・内容を公開・更新した。

・2009年5月には、第46回日本アフリカ学会学術大会において、本研究課題の成果を7題のポスターとして発表した。2009年9月アジスアベバ大学から生業知ユニットおよび関係知ユニットの海外研究協力者を京都に招いて(別資金)研究のまとめと進捗状況の報告会をおこなった。

・2009年11月には、アジスアベバで開催された第17回国際エチオピア研究学会において、研究代表者、分担者、協力者の3人が報告をおこなった。

・全体成果のとりまとめと発表としては、2010年5月には、第47回日本アフリカ学会学術大会において、本研究課題の成果を4題のポスターとして公表した。2010年2月には、来日中のエチオピアの農業研究関係者を招いて、エチオピアにおける農業技術普及と在来知に関する国際ワークショップを開催した。また、研究分担者、連携研究者および研究協力者計4人が本研究計画の成果をあいっいで単著として出版した。

・研究成果の社会還元をめざして、滋賀県大津市立小松小学校での国際理解授業や、京都市内小学校での講演の企画に研究代表者が従事した。また、一般市民向け公開講座(京都大学アフリカ地域研究資料センター主催)や、調査対象国邦人コミュニティーの集会においても、研究代表者が本研究計画の成果をわかりやすく話す機会をもった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計54件)

- ① Shigeta, Masayoshi, Co-edited with Tarsitani, B.A. & S. Tarsitani. "Preserving Local Knowledge in the Horn of Africa: Challenges and Prospects for Collaborative Research in Oral Literature, Music and Ritual Practices" In : "*African Study Monographs. Supplementary Issues*" No.41, 2010, pp.1-151. (査読有)

- ② 西真如「ウイルスと共に生きる社会の倫理—エチオピアの HIV 予防運動にみる自己責任と配慮」：法政大学人間環境学会『人間環境論集』10 巻 2 号、2010 年、pp.47-61. (査読有)
- ③ Nishi, Makoto "Information Sharing, Local Knowledge, and Development Practices: The Experience of Community-based HIV/AIDS Initiatives among the Gurage, Southern Ethiopia" In: "*Nilo Ethiopian Studies*" No.15. (印刷中)(査読有)
- ④ Kaneko, Morie "Variations in pottery making in southwestern Ethiopia. Research in Ethiopian Studies" In: "*Selected papers of the 16<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies, Trondheim July 2007*" Vol. 72, 2011, pp. 187-199. (査読有)
- ⑤ Sagawa, Toru "War experiences and self-determination of the Daasanach in the conflict-ridden area of northeastern Africa" In: "*Nilo-Ethiopian Studies*" No.14, 2010, pp. 19-37. (査読有)
- ⑥ Tarsitani, B.A. "Revered Vessels: Custom and innovation in Harari basketry" In: "*African Arts*" 42(1) Spring, 2009, pp. 64-75.
- ⑦ Ito, Yoshimasa "Relationships among Natural Resources and Human Activities as a Complex System: Focusing on the Coffee Forest of Geeraa, Jim ma zone" In: "*17<sup>th</sup> International Conference of Ethiopian Studies*" 2009, pp.187-199. (査読有)
- [学会発表] (計 66 件)
- ① 砂野唯・伊谷樹一「穀物の地下貯蔵庫ポロタの機能と役割—エチオピア・デラシェ特別自治区の事例～在来知とポジティブな実践(9)」日本アフリカ学会第 47 回学術大会(ポスター発表)、2010 年 5 月 29-30 日、奈良県文化会館。
- ② Dilu Shaleka "Religious Revitalization among the Sidama～在来知とポジティブな実践(10)" 日本アフリカ学会第 47 回学術大会(ポスター発表)、2010 年 5 月 29-30 日、奈良県文化会館。
- ③ 田中利和「トラクターか牛耕か：エチオピア高地における在来牛耕の作業能率に焦点をあてて～在来知とポジティブな実践(11)」日本アフリカ学会第 47 回学術大会(ポスター発表)、2010 年 5 月 29-30 日、奈良県文化会館。
- ④ Kaneko, Morie "Pottery Making as Community-based technology: Japanese perspectives in Africa. Technology and culture" *Éléments d'anthropologie fondamentale Objets, techniques et cultures*, 27/05/2010, Centre Norbert Elias, Ehes Marseille, France.
- ⑤ 田中利和「エチオピア高地における在来畜農業の可能性—オロモの人々の牛耕に着目して—」日本ナイル・エチオピア学会第 19 回学術大会、2010 年 4 月 17 日、明星大学。
- ⑥ Shigeta, Masayoshi "On the Ensete project: Futurability of "Tree against Hunger" in Ethiopia" 17th International Conference of Ethiopian Studies, 01-06/11/2009, Addis Ababa University, Ethiopia.
- ⑦ 重田真義「アフリカ在来地とその射程—在来知とポジティブな実践(1)」日本アフリカ学会第 46 回学術大会、2009 年 5 月 23-24 日、東京農業大学。
- ⑧ Shigeta, Masayoshi "Local product exchange at markets in southwestern Ethiopia: Case study of coffee leaves and pots" International Workshop: Consumers, Marketplaces and Urban Creativity: Place-Bound and Global Dynamics of Value Transformations, 30/04/~05/05/2009, Hong Kong University, China.
- ⑨ 西崎伸子「エチオピアにおける野生動物保全：在来知とポジティブな実践(2)」日本アフリカ学会第 46 回学術大会、2009 年 6 月 23-24 日、東京農業大学。
- ⑩ Shigeta, Masayoshi "African Local Knowledge Formation and Positive Practice" International Workshop: Preserving Local Knowledge in the Horn of Africa: Challenges and Prospects for Collaborative Research in Oral Literature, Music, and Ritual Practices. 17-18/09/2008, Harari Cultural Center, Ethiopia.
- ⑪ 重田真義「アフリカ研究における当事者意識の問題点」公開シンポジウム II (日本のアフリカ研究とアフリカの発展)、日本アフリカ学会第 45 回学術大会、2008 年 5 月 23-24 日、龍谷大学。
- ⑫ Nishizaki, Nobuko "Understanding villagers' livelihoods and their importance in community-based wildlife conservation: a case study of Ethiopia" Re-conceptualization of Wildlife Conservation; Toward Resonance between Subsistence and Wildlife, 07/08/2008, Embassy of Japan, Kenya.
- ⑬ 伊藤義将「エチオピア南西部高地森林域におけるフォレストコーヒーの採集活動」日本ナイル・エチオピア学会 第 19 回学術大会、2008 年 4 月 20 日、弘前大学。
- ⑭ Shigeta, Masayoshi "Local Knowledge for Positive Practice: How enset (*Ensete ventricosum*; Musaceae) Farmers' Varieties

are Conserved in Ethiopia? In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa" The First International Workshop of G-COE Program, 12-14/03/2008, Kyoto.

- ⑮ 重田眞義「アフリカ在来種の生成とそのポジティブな実践に関する地域研究」日本文化人類学会第41回研究大会、2007年6月4~5日、名古屋大学。
- ⑯ 西崎伸子「ワイルドライフ・マネージメントにおける住民参加ーエチオピアの野生動物保護区における〈協働〉実践から」アフリカ学会東北支部会、2008年2月22日、弘前大学。

[図書] (計29件)

- ① Sagawa, Toru (分担執筆) "Local Order and Human Security after the Proliferation of Automatic Rifles in East Africa" In: "Malcolm McIntosh and Alan Hunter (eds.) *New Perspectives on Human Security*". Sheffield, Greenleaf. 2010, pp. 250-258.
- ② 佐藤靖明『ウガンダ・バナナの民の生活世界ーエスノサイエンスの視座から』松香堂書店、2011年、pp.148.
- ③ 中村香子『ケニア・サンプル社会における年齢体系の変容動態に関する研究ー青年期にみられる集団性とその個人化に注目して』松香堂書店、2011年、pp.293.
- ④ 金子守恵『土器つくりの民族誌』昭和堂、2011年、pp.287.
- ⑤ 佐川徹『暴力と歓待の民族誌ー東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』昭和堂、2011年、pp.478.
- ⑥ Sagawa, Toru (分担執筆) "Local potential for peace: Trans-ethnic cross-cutting ties among the Daasanach and their neighbors" In: "*To Live with Others: Essays on Cultural Neighborhood in Southern Ethiopia*" Christina Echi-Gabbert and Sophia Thubauville (eds.) Rüdiger Köppe Verlag, 2010, pp. 99-127.
- ⑦ Tarsitani, B.A., S. Tarsitani & M. Shigeta (eds.) "Preserving local knowledge in the horn of Africa: challenges and prospects for collaborative research in oral literature, music and ritual practices" In: "*African Study Monographs* Supplementary Issue 41" The Center for African Area Studies, Kyoto University 2010, pp.155.
- ⑧ 重田眞義 (分担執筆)「社会学からのアプローチ」高田公理、堀忠夫、重田眞義 編『睡眠文化を学ぶ人のために』世界思想社、2008年、pp.164-191.
- ⑨ 西崎伸子『抵抗と協働の野生動物保護ーアフリカのワイルドワイフ・マネージメントの現場から』昭和堂、2009年、pp.197

- ⑩ 西真如『現代アフリカの公共性：エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践』昭和堂、2009年、pp. 289.
- ⑪ 西真如「病と共存する社会をのぞむ：エチオピアのHIV/AIDS予防運動」武田丈・亀井伸孝 編『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社、2008年、pp.204-217.
- ⑫ 金子守恵「手指をつかって土器をつくる：エチオピア西南部アリ女性職人の身体技法」菅原和孝 編『資源人類学 第9巻 身体資源の構築と共有』世界思想社、2007年、pp.113-140.

[その他]

ホームページ等  
<http://zairaichi.org>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

重田 眞義 (SHIGETA MASAYOSHI)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授  
研究者番号：80215962

### (2)研究分担者

伊谷 樹一 (ITANI JUICHI)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授  
研究者番号：20232382  
山越 言 (YAMAKOSHI GEN)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授  
研究者番号：00314253

西 真如 (NISHI MAKOTO)  
京都大学・東南アジア研究所・特定助教  
研究者番号：10444473  
金子 守恵 (KANEKO MORIE)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特定研究員  
研究者番号：10402752

### (3)連携研究者

篠原 徹 (SHINOHARA TORU)  
滋賀県立琵琶湖博物館・館長  
研究者番号：80068915  
井関 和代 (ISEKI KAZUYO)  
大阪芸術大学・造形系工芸学科・教授  
研究者番号：60073285  
峯 陽一 (MINE YOICHI)  
同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授  
研究者番号：30257589  
西崎 伸子 (NISHIZAKI NOBUKO)  
福島大学・行政政策学類・准教授  
研究者番号：40431647